

英国&フィンランドのコモンズ紀行(メモ)

北海道を念頭においたコモンズ関係の検討ととりまとめを進めていた小磯、関口、草苺の3人は、一度欧州のコモンズの事例を見聞して北海道との比較の上で記述してみようという共通認識に至り、コモンズとフットパスの歴史が深い英国と、自然享受を万人権というゆるい慣習で保証しているフィンランドに的をしばって検討を始めた。ローカルなコモンズを描くにあたり少し大きな座標の上で描こうという意図もあつたことだった。これらは24年度に入った5月から準備をはじめ、9月の中旬から約2週間、英国、次にフィンランドの順で現地を巡りヒアリングを行うことになった。英国は北海道出身でブリストル在住の白鳥郁子さんに通訳とガイドをお願いし、フィンランドでは24年度前半まで北海道大学に設けられたフィンランドセンターに勤務していたウラ・ピッコラさんに同じくガイドと通訳をお願いした。以下、行程順に、コモンズをめぐるヒアリング内容と見聞したエピソードを紹介してみたい。

(なお、正式には25年度中に別途取りまとめる予定。また、このメモのページがかさんだため画像はHP写真集「英国とフィンランドのコモンズをたずねて」参照願います)。

英国のコモンズ紀行

~~~~~

まず英国の滞在記では、コモンズとフットパスを軸にして、現在、ブリストルという具体的な地域で活動する民間団体を訪問し、実際の活動状態や課題について生の声を聞き体験することに主眼を置くことにした。後半のフィンランドで、国の省庁や大学など公官庁を主として伺ったのはやや対照的になる。英国の歩く権利などは庶民の闘いの歴史でもあるが、その歴史は、平松紘著『イギリス緑の庶民物語』という念入りな文献調査と現場をふんだ名著がすでにあつて詳しいので、それを大いに参考にした。また、『生活見なおし型観光とブランド形成』(平成20年北海道開発協会刊)という共著で、ドイツの森林保養地と英国のフットパスとを、ようやく注目され動き始めた北海道の活動を比較しながら筆者が担当した章なども改めて読み直した。

コモンズとフットパス関係のヒアリングは、フットパスで有名なコースがあるコッツウォルズに近いブリストルを基点にした。ブリストルという一地方で、歩く権利を擁護するランブラーズ Ramblers (旧ランブラーズ協会)、ナショナルトラストなどを生んだオープンスペース協会 Open Space Society、英国の施策として行われているコミュニティ・フォレストのフォレスト・オブ・エイボン・トラスト Forest of Avon Trust でヒアリングを行い、ロンドンではウィンブルドン・コモンとエッピング・フォレストを体験した。その合間に、コンパクトな理想都市空間として今でも人気の高い田園都市レッチワースを訪問した。英国編ではこれらを時系列に沿いながら述べていくことにした。

なお、訪問に当たっては次のような趣旨の英文をお送りし、訪問の背景とねらいを事前にお知らせした。

訪問理由と総括的質問の主旨 (英国とフィンランドとも同じ)

- ・日本では、少子高齢化が進んで、地方に人が住まない時代がくる。国家予算も減る中、オープンスペース（森林、原野、農地の非建閉地）の管理が課題になってきている。
- ・その背景には、日本には個人所有権が強い歴史があって、土地の硬直性と管理放棄の問題がある。さらにそのことによって、森林などのオープンスペースの荒蕪地化、景観の劣化、さらには生物多様性の低下が指摘されるに至っている。
- ・わたしたちはこのような観点に鑑み、北海道の土地利用密度の低い用地において、土地所有者との信頼関係の上に「環境コモンズ」という概念を設けて、NPO等の新しい公が、オープンスペースの利活用と管理を実施する方策について2008年頃から検討を始めた。学識経験者等による環境コモンズの研究会と、実際に環境コモンズを実践するNPOの2方向で、実証的な研究を開始したところで、今回の訪問は、その一環である。
- ・このような北海道の現状からみると、英国では、16世紀以降2度のエンクロージャーに対して市民サイドがコモンズとしての権利を粘り強く獲得し、その後には各種法制度の整備、アソシエーションの設立と運営、チャリティ等の予算のバックアップなど、日本にはあまりない歴史と整備がなされアクセス権と管理体制の両面が確立されているように見える。逆に、法律で規定しないで慣習法として国民の自然享受が行われているフィンランドのしくみはきわめて北海道の現状に近い面がありそうだ。
- ・長年の取り組みを反映した精緻なネットワークや制度を、きわめて限られた時間内で理解するのは正直なところ大変難しいかと思われるが、経過および現状と課題と対応の方向を聞かせてほしい。

\* 高齢化率 2010日本平均；23.3%、北海道；25.2% 世界第2位はドイツとイタリアで約20%

【1日目】

9月13日(木) 新千歳～成田～ヘルシンキ～ロンドン～ブリストル

午前8時に新千歳空港を発ち、成田空港から9時間のフライトでヘルシンキはヴァンター空港に着いた。ここではわずかに45分の乗り換えでロンドンのヒースロー空港へ向かい、さらに空港内バスセンターからバスに2時間乗って現地時間の9時過ぎにブリストルに到着した。千歳空港を出てから正味移動に要したのは21時間にもなるが、翌日金曜日に集中してしまったヒアリングにとってはむしろ好都合だった。スルーしたヘルシンキのヴァンター空港はコンパクトで、空港内移動が楽であり欧州移動ではとても快適なハブ空港であ

ることを知った。13 日中にブリストルに着くことができたのはこのおかげである。また、北大がヘルシンキ大学に欧州の拠点オフィスを置いたのは、欧州各都市・各大学へのアクセス性が理由だと聞いた。

ブリストルのバスセンターにはそれから数日間通訳とガイドをしてもらう白鳥さんが迎えに来てくれた。宿泊したのは、ブリストルの高級住宅街にある、白鳥さんお勧めの B & B で、タクシーで着いたその宿は大柄でやや赤ら顔の主人が陽気に対応してくれた。ブリストル時間の午後 9 時過ぎまで、札幌から 20 時間以上かかったと言うと主人はおおげさにびっくりして見せた。彼は晩酌中だったのか、居間のテーブルには飲みさしのワインボトルがあった。全体がややアンティークな調度で、ようやく落ち着いた最上階の 4 階の部屋は床の一部とタンスが傾き、ノブも落ちそうなものがあった。しかし雰囲気がりッチである。後に眺望も超一流であることを知る。

## 【2日目】

**9月14日(金) 雨のち薄曇り ランプラズ、オープンスペース協会、フォレスト・オブ・エイボン・トラストにヒアリング**

### 初日の朝の散歩

朝 4 時前に目を覚ますと外は雨だった。それも軽く窓をたたくような、そんな降り方でちょっと不安な気分にしたが、今日は英国で一番タイトな日だから、ともう一度床につく。なにせ夏時間の欧州は朝が遅い。7 時前になってようやく足下が見えるようになったので、外に出てみる。B & B は、エイボン川の東岸にあり世界で最も古い設計というクリフトンのサスペンションブリッジのすぐ南 300m ほどの所に位置している。ブリッジまではややきつい昇りになっていて、一帯はオブザーバトリー・パークにつながっている。雨の中だというのに、すでにフラットからジョギング姿の夫婦が出てきたりしているところなどをみると、一帯はなにやら、美しい公園に面した経済的に豊かな層の住宅街であることはすぐわかった。のちに歩いてみると B & B の南側は瀟洒なホテルやきれいな町並みの繁華街が続いていた。

ブリッジまでの歩道には妙なものがおびただしい数、落ちている。一見してそれはナメクジ slug であることがわかる。雨の後で芝から這い出してきたようだ。北海道ならさしずめ雨の後のミミズだが、丸々と太っているし数 m おきにいるのでこれにはちょっと圧倒される。英国にきて最初に出会った野生の生き物だ。

### (クリフトンの吊り橋)

10 時半からのヒアリングのため、朝食は 8 時にしてもらい 9 時半には白鳥さんが見えてさっそく事前打ち合わせを始める。仕事の話の前に、白鳥さんにブリストルの歴史や特徴

などを聞くと、まずブリストルはロンドンの西に位置する古い町だから、東京に対する京都、大阪のような反骨精神があるという。古くは奴隷貿易を含む米国との貿易と造船で莫大な富を蓄積したということのようだ。またブリストルと隣のバースはかつてともに有名な温泉保養地で、貴族のフラットがあまた存在したらしい。ちなみに、現在、B & B周辺のフラットは3ベッドルームで4000～5000万円が相場だろうと言っていた。やはり高級住宅街のひとつらしい。

### ランブラーズとOSSの足取りをひもとく

話の内容に入る前に、ここで私たちが訪問のアポイントを求めたオープンスペース協会 Open Space Society (以下、OSS) とランブラーズ Ramblers(旧ランブラーズ協会、以下ランブラーズ)について触れておこう。オープンスペース協会は、1865年にコモンズ保存協会として設立され、今年140年以上になる英国最古の環境団体で、創立者には日本でも有名なJ・S・スチュアートやオクタビア・ヒルがいる。OSSから1889年に英国野鳥保護協会、1895年にナショナル・トラスト協会が誕生し、日本ではむしろこちらの方が有名になっている。OSSのミッションは一般国民の自然享受のためにコモンズを保全することとされており、初期の成功事例として、今回ショートウォークをしたエッピング・フォレストやウィンブルドン・コモンなどの保全が知られている。役割としてパブリックパスの保全と創造をあげており1899年にナショナルフットパス保全協会と合併している。

OSSのホームページにはこう書いてある。「わたしたちの主な仕事は、私たちのメンバーが地元のコモンランド、町や村の緑、オープンスペースや公共のパスを保護するのを助け、質問に答えることである。わたしたちはウェールズの環境食料田園委員会に、コモンランドの行為の申請でアドバイスし、公共道路権のルート設定の提案がいつあっても自治体によって通知される。パスとスペースの保護のための法律の変更をキャンペーンしている」(草苺訳)。OSSはイングランドとウェールズに2,600人の会員がいる。

一方のランブラーズは、ウォーキング好きの英国人の願いを叶える歩行する権利を守る組織で、近年名称をランブラーズ協会からランブラーズに変えた。約50の地域に485のランブラーズのグループがあり、会員は10万人以上いるという。1935年の設立で、その直前には活動域の狭さに業を煮やしたウォーカー連合が立ち入り禁止区域へ不法侵入して逮捕者が出るという歴史上有名な出来事があった。ごく最近では米国歌手マドンナの英国内別荘地での訴訟でも有名になったランブラーズは、一部で「闘うランブラーズ」のイメージも持たれているようだ。英国のウォーカーは、詳細なフットパスマップとところどころに設置されたサイン(多くはなく地味)を頼りに主として美しい田園地帯を縦横に散策する。フットパスには正式には歩くだけのフットパスのほかに、乗馬もできるブライドルウェイと、自動車も通れるバイウェイがある。公式の長距離自然歩道だけでも3,200kmあり、2001年の田園委員会の資料では歩くためのイングランドのフットパスだけでその地域別通行権の延長が14万6,000kmと報告されている。これを村落ごとにあるパブを中継地にして食事と休憩を取る。かつてのランブラーズ協会のHPでは2004年の推計値で、イングラ

ンドの利用者総数 5 億 2700 万人、消費額約 1 兆 3000 億円 (H20/8 £ 1 = 212 円) と報告している。フットパスだけでかなりの経済効果がある。

### ランブラーズのスーザンさんとOSSのクリスさん

さて、前置きはここまでとして、10 時半にランブラーズのスーザン・カーター Susan Carter さんが見えた。事前情報では、スーザンさんはかつて息子さんが日本に留学していたことがあり、自分でもご子息が住んでいた倉敷に行ったことがあるという親日家である。とても柔らかい物腰で比較的ゆっくり上品な英語で話してくれる。ややしてオープンスペース協会のクリス・ブロー Chris Bloor さんのなにやら明るい話し声が聞こえて、これで午前の話し手がそろった。お二人とも、地域活動の担い手として白鳥さんをお願いしていた事前のアポイントによってお会いすることになったのだが、このお二人の適役にたどり着くまでには、実はイギリスのオープンスペース協会の事務局長をしているケイト・アッシュブルック Kate Ashbrook さんがこちらのミッションに関心を持ってきて対応してくれることになっていた。ケイトさんはランブラーズ協会の会長もなさっている高名な女性で、願ったり叶ったりで話は進んでいたが、ケイトさんのお住まいはロンドンの西のレディングというところで、当日の短時間の移動ではヒアリングが難しいと言うことになり、間にもうひとり挟んで、今日のお二人を紹介してもらった。本当に人の手を煩わしてセットされたヒアリングであるが、お二人は、別々の会だが旧知の間柄のようで好都合だった。

前述したように、こちらの訪問目的は前日までに e-mail でお渡ししてあったのでご挨拶のあと早速お話を伺うこととなった。まず、スーザンさんが、概略を語った。渡されたメモは当日朝、白鳥さんに当てたメールそのもので、そこにはこんなことが書いてあった。

- ・みなさんにもうすぐ会えるのをとても楽しみにしている
- ・訪問者の背景を書いたメモが届き、そのことについて先になにか書いたのだが、どうやらどこかにいってしまったので、このメモを持参したい。
- ・ランブラーズ協会は、76 年前に設立されたキャンペーン組織である。この間、内部に評議会を持ち、地域やグループごとの委員会と文章化された正式な組織で構成されている。漸次、進展があり、代表とトラスト会議、60 名の有給スタッフを抱えている。会員は 11 万 4000 人で、会員数は落ち込んでいる。全国的な web サイトは [www.ramblers.org.uk](http://www.ramblers.org.uk) である。
- ・このうちブリストルのグループは 800 名以上の会員がおり、それは 2,000 人以上の会員がいるエイボン地区の一部にあたる。ウォーキングの発展のため歩く環境を守り改善するキャンペーンから実際の活動範囲を受け持っている。
- ・わたしは政府機関で公務員として働いていた。最後の 8 年間は、カントリーサイドのレクリエーションに関係していた。個人的には退職してからランブラーズのメンバーになった。わたしは協会において英国全体の管財人会議の委員になっており、政策委員会に

も関与している。目下のところ、英国全体のキャンペーン広報委員である。また、エイボン地域とブリストルグループの環境と計画に関する委員をしている。

・ミーティングの後、なにか質問があればメールでもらえば喜んでお答えする。

(筆者訳)

### (ヒアリング風景) @ B & B

スーザンさんはこのペーパーを補完するように次のように付け加えた。「英国では 19 世紀に市民が環境に強い関心をもって集ってきた。自分たちの街や市を考える市民協議会 Civic Society はほとんどの自治体にあり、それも良好な都市環境を求めるようになったからだ。もともとシビクトラストという、ランブラーズに似た全国組織があって、その下に地方グループを持っている。シビクトラストは 19 世紀、ランブラーズと一緒にキャンペーンを開始した。19 世紀というのは、人々はごみごみした不快な所に住んでいた（特に北イングランド）ので、人々は地主の土地や山や原野にアクセスしたがっていた。そのためキャンペーンを始めたのである。そのキャンペーンは 20 世紀半ばまで続き、ランブラーズのような組織はそうして形づくられ、田園の管理とたくさんの法律に到達した。20 世紀の中頃、田園と都市の双方を守るべくたくさんの環境法と法案ができ、1949 年の国立公園および田園地域アクセス法の制定に結びついた。人々に支持され、それが 20 世紀まで続いている。

最近、事情は変わり、これらの組織の会員にやや変化が現れメンバー数が落ち込んでいるがそれも自然だと思っている。実際人々はあまたのキャンペーンを勝ち取り、一方人々は組織に入りたがらない。しかしそれでもこの地方には環境団体が存在しこれからも続くだろう。ブリストル・シビック・ソサエティは伝統的建築を保存するのが役割だったが、その内容についてはこれからクリスさんが触れると思う。」

スーザンさんはこのようにランブラーズと英国社会の環境運動の変遷を語ってくれたところで、わたしは「英国の闘いと制度の積み重ねを日本のレポートで勉強してきたがとても複雑で難しいと感じている」と率直に感想を述べたところ、スーザンはすかさず「そう、大変複雑だ」と答えた。

### クリスさんのフットパスの取り組み紹介

スーザンさんの 5 分ほどの冒頭のブリーフィングが終わって、今度はクリスさんにパワーポイントを使って説明してもらおう。タイトルは「BRISTOL A CITY IN THE COUNTRYSIDE」である。クリスさんは、大柄な白髪の紳士で、学校の先生を退職して数年目らしい。白鳥さんのオファーに対してすぐ友人のような気軽さで対応してくれ、この日のヒアリングまでとんとん拍子に進んだようだった。クリスさんは 17 世紀に実際にあったブリストルの内戦から話を始めた。クリスさんは田園都市ブリストルを意味づけするも

のとしてコミュニティ・フォレスト・パスに強い関心を持っているという。スライドの写真にはビルの真ん中に林のような樹木が見られるが、それはナナカマドで、英国市民戦争の有名な戦場だったという。こういう跡地がブリストルの至る所にあり、第二次世界大戦時は、ヒットラーの侵入を防いだ。戦車の進入を防ぐ壁を作ったが、それは WAR WALKS と呼ばれる溝（トレンチ）だったりコンクリート製のもの（pill box）だったりする。そのルートはクリスさんが言うコミュニティ・フォレスト・パスとほぼ重なっていて、現在の市街地の外側を通り、時には住宅地区を突き抜けている。

### （グリーンベルトの写真 = パワーポイントから）

そのそも forest の元になる foras というラテン語はゲートの意味で、本来樹木や森林とは関係がなく、そこには Woodwose と呼ばれるワイルドマンが住むと信じられていたとの説をクリスさんはする。このルートを使って、人々はグリーンマンチャレンジ Green Man Challenge と呼ばれるウォークを始めたい。そして宣言した。「森のワイルドマンになろう」。Woodwose になるために、24 時間以内に 45 マイルのコミュニティ・フォレスト・パスを回るチャレンジをしてグリーンマンになるらしい。すでに 80 人以上のグリーンマンが生まれているが、トップの記録は 7 時間あまりだから最も早い人で時速約 10km 程度のものである。参加者にはいろいろな職種の人が出て、40 マイルの別のコースをリレーで回る人もいる。医者も待機し、飲み物サービスも地域がボランティアで行っている。

### （woodwose の写真）

グリーンマンチャレンジは一つのイベントだが、よく、理想的なフットパスは公共交通機関を使えることと言う。それでクリスさんは公共交通とリンクした道路マップを制作した。これは北海道でもとても重要なニーズであるが、実際はそんな例はあまりない。クリスさんは、コミュニティ・フォレスト・パスの一周するルートがある本に提言している。これは実際の森がそこになかったりするため、これを使ってほぼコミュニティや公園にたどり着くができる。しかしブリストルと北サマーセットの境界では通行がブロックされていた。そこを横切るパスは、通過できない治安の悪いところだったのである。クリスさんはこの土地の人々と通過させるための仕事をしたが、このような交渉と調整が O S S のやっていることのひとつである。彼らは実際に現地へ出向きパスを通して。また、歩行が困難な方々が短い距離のウォーキングに参加できるようなサポートもしている。クリスさんは昨夜もブリストルの委員会にでた。彼らも各所のフットパスが確実に通れるよう動いている。特に「チキン」ルートの南東側の部分は最悪で、教区の境でもある。ブリストルの市協議会の担当セクションはこの開通に働きかけているところだという。

スーザンさんは次のように付け加えた。「ランブラーズは歩く権利に関する広いネットワ

ークをもっており、実行する権利があり自治体もそのエリアのフットパスを維持する責任を持っていて、各々の自治体は専門の職員を抱えている。それらは法律の定めるところで特にランブラーズの専門とするところでもある。わたしたちランブラーズは自治体が確実に実行するようキャンペーンをしている。これはかつて公道であり今も公道であるという、この国の非常に古い権利である。人々はかつて先人が歩いたように古いこれらの道を歩く権利を持っていて、それはオープンにされたエリアと分けられている。OSSは、コモンランドのエキスパートであり、そこで人々はコモンランドや村の緑の広いエリアを行き来する権利がある。歩く権利とはそれらを通る直線的なルートである。だからこの国で私たちがふたつの歩く権利を持っていることになり、一つは空間であり一つは道である。

オープンスペースの権利についてともにキャンペーンをしているように、ランブラーズとOSSの間には役割の上でオーバーラップしている。クリスさんによれば、ケイト・アシュブロックさんのように一人の会員が両方の組織に属していることもあるから、しばしば人々はフットパスのキャンペーンする人と、空間の権利のキャンペーンをしている人を同じものと思っているようだ、という。線と面の双方から権利の維持をこの組織がコンビネーションをとりつつ関わっていることが見えてきた。

このあとフットパスの基になるものとしてローマ法を紹介してくれた。街や村の20年ルールというもので、もし20年間歩き続け誰も止めなければ、それは歩く権利と見なされるというものだった。スーザンさんのランブラーズはこの古い法律を新しいものに置き換えることであり、それはCROW ACT2000 ( countryside right of way ) という法律に結晶したという。

(以下、とりあえず、訳。のち、要点のみプラス)

スーザン：ランブラーズとOSSは大変古い法律に関係している。公務員時代のわたしの仕事は、両方に関わっていた。コモンランドを扱う人たちは、クリスさんが狩猟場の話をしたように、ノルマン民族にさかのぼる。それはふたつの組織が互いに守り協力してきたとても古くて大切な法律である。

クリス；OSSが最近より力を入れていることはローマ法に基づく、街や村の緑の20年ルールである。それはもし20年間歩き続け誰もそれを止めなければ、そして権利のように持続させてきたらそれは歩く権利と見なされるというものである。同じように、もしあなたが原野を所有し、人々がやってきてクリケットをし、ベリーを摘み、凧を揚げるなど20年間使用し続け誰も止めなければ、それを行っていいという許可を与えていたとみなし、人々は権利を獲得したとするものである。これはローマ法の新開拓地での居住権に由来するもので、もし20年保有でき誰も止めないで維持したら、それはその人のもの、という法律である。



スーザン；それらは非常に古い法律で、私たちのふたつの組織がやろうとしていることは、それらの法律を最新のものにすることである。しかし 20 年ルールは、フットパスのない荒地ではよりむずかしい。人々がかねて歩いていた荒地へのアクセス権を獲得しようというランブラーズのキャンペーンは、人々はルートを示すことはできなかった。だから、わたしたちは、CROW2000 と呼ばれる新しい法律を得た。それは荒地や山を散策する大きな新しい権利を提示している。同時に新しい法律が街や村の緑の法律にも最新のものとなった。ふたつの組織は法律を変えるキャンペーンをし、それらをより拡大することになった。それでわたしたちはつながっている。これらの古い権利はランブラーズと OSS の礎である。

クリス；わたしがここに住む人々と関係するようになったとき、ブリストルの市民協議会は、ほかの緑地を改善するための費用を得るためあるグリーンスペースを売ろうとした。そして子供のための遊び草地を購入するところだった。しかしながら貧困層の違った緑地であることが明らかになった。それはあまりいい土地ではないので売った方がいいともっと裕福な層で言われていた。その緑地はよく維持されているので、あまり良くない土地を売ってできるお金はそこへ行くことになっていた。社会的な不公平がそこにあるのはあきらかだった。OSS は、よくまとまった地域の人々が「3,40 年にわたって、この緑地を使ってきた」と発言するのをうけてこの権に参入している。そうすることは当然のことであろう。よく阻止化されたミドルクラスの人々がアドバイスを受れたり、どう街の緑を登録するかを考えるために OSS に参加している。

街の緑地として登録されたほとんどの土地は、開放されたオープンスペースだった。そのいくつかはまったく美的ではなかった。わたしたちはほとんどは学校の子供たちとともにそこに気を植えている。写真 50；ある方が私たちに樹木を寄付してくれたので、フットパスにそってボランティアと木を植えた。写真 51；境界部分の CROSS 沿いに人々をウォーキングに連れ出した。写真 52；これはみんなが緑地について語っているところ。ここは、ハートクリフにあって家を建てたいと思っている場所である。写真に写っている人たちは OSS メンバーとランブラーズ、そして地域評議会委員である。ブリストル評議会は、多くの人々が反対キャンペーンをしたのでこの計画はあきらめることになった。わたしもそれに関係した。

これには政治的な側面がある。この計画は行政を運営している自民党に支持されていた。そこでブリストル中でおきたのは、トーリー党(保守党)と労働党支持者が実際に輪になって「私たちはそうなるのを好まない」と踊りながら手をつないだのだった。先月わたしはそのミーティングに行ったが、そこには建築に関する別の提言が用意されていた。わたしはトーリー党と労働党の人たちが互いにこれほど仲良くやっているのを見たことがない。それはきわめて不気味だった。

スーザン ;( 地方政治は地域環境を決めるふりをしたのか、という白鳥さんの質問に対して ) わたしの見方ではブリストルではわたしたちは強い地方主体を持っていない。緑地戦略は多数の政党に支えられているので当然そこには反対がある。ある人々は考えを変えた。わたしたちは強い地方評議会を持っていない。それはこれらの異なった党派があるからである。なぜある市長に投票するかの理由のひとつは、どの地方の行政が何年にもわたって継続されようと、連立と変化によってこれといった効果がなかったからである。

ブリストルは今、市長がいる。しかし市長はこれまでずっと議会が選ぶもので、市長には全く力がなかった。市長はその時々の名目上の長だった。ブリストル市民が今度投票するという事は、人々が選んだ市長を持つことであり、どの党が力を持とうとも市長は誕生し市民は議会のリーダーをいただくことになる。この変化はこの 11 月に実現するがそのときブリストル市民ははじめて市長選を体験する。そしてこの新市長がいろいろなことに影響力を持ち、みんなが市長として立候補する人々に働きかけようとしているところである。

私たちブリストルのランブラーズが進めていることは、私たちが政治団体でないし、特別の党派を支持するわけではないから、政策を支持する人々を仲間にする事である。そうしてわたしたちはウォーキングについて考えを提示、市長になるであろう全ての人に対して「私たちの考えを支持しますか？」と語りかけるつもりです。そしてイエスと言う言葉を期待している。

### ランブラーズの歩みと現状

スーザン ;( ここからスーザンさんがランブラーズを本格的に語る時間 ) ランブラーズは今年 76 周年になる全国組織である。そのルーツとなる動きは 19 世紀にさかのぼる。その頃人々は大きな市街地から出てウォーキングすることに大変関心を持つようになっていた。そして土地のオーナーたちはそのウォーキングを止めたかった。そこには私たちの社会の大きな分かれ目があり、人々は特に山々と荒地にフットパスでアクセスできるよう動いた。なぜなら、フットパスには私たちが議論し当時の彼らも歩く権利が守られもっと歩ける権利を確かなものにするよう求めていた。かねてから歩いていた場所を土地のオーナーたちが拒絶し始めたからである。こうして立ち上がり、多くの歩く組織ができた。

1932 年ころには、ピーク地方に大きな不法侵入事件が起きた。人々はいつも歩いていた荒地やオープンスペースに戻ることを要求し、オーナーは妨害した。そのため群衆はアルトに押しかけ、個人所有地の猟場管理人と人々の間で争いがあった。そのうちのある人たちは投獄された。その一部はウォーカーだった。このキンダースコート侵入事件が大きなきっかけとなって、大地を歩き回りたい人々の同情を集めた。ランブラーズはこれがきっかけで結成されほかの組織もそのころ生まれた。多くの人々はウォーカーに同情的だった。行政も反応を示した。なぜならこれら全ての人々が投票権を持ち、さらに多くの歩きたい人、土地を持つ人、共々投票権を持っていたからである。どんな理由であれ、当時は社会主義の政権であり、共感があり、政府は国立公園や美しさで目立ったエリアなどいろいろ

なことを監視する委員会を設立した。人々が行くことのできる場所には、大きな環境運動が起きた。そこにランブラーズも加わることになる。国立公園委員会のようなほかの組織も入ってきた。1940年代の終わり、わたしたち英国人は多くの法律を持ちウォーキング人気は定着した。人々はいつもウォーキングクラブを持ち、互いにウォーキングを楽しんだ。この国にはまさにおびただしい数のウォーキングクラブがあり、日本と同様、とても人気のある国民的娯楽であり、ここでもウォーキングは最も人気のあるアウトドアのレジャーである。何百万もの人々が週末には出かける。ある人は自らの家族と、ある人はクラブで。ランブラーズで特筆すべきことは、行政の施策に影響を及ぼす全国組織であることである。;

特にランブラーズは行政と向き合う全国組織で大きなキャンペーンを行い、専門集団の中心的存在であることである。専門とは、フットパスを守る法律であり、それは大変複雑である。人々はフットパスを封鎖するだろうし、彼らはそこにいない、とオーナーたちはいう。ある人々はマップでルートを探し「20年以上使ってきた」「あなたもマップにそれを示したらいい」などという。フットパスを作りたい人もいるし、フットパスを封鎖したい人、フットパスを正当に維持管理したくない地方行政もいる。そこでランブラーズは、全国規模で専門家集団の中核としてフットパスを守るための専門職員を雇っている。中央本部は、約60人、そのうちの何人かはフットパスとブライドルウェイの歩く権利の専門家で、裁判に関するアドバイスをしたり、自ら訴訟を行うこともある。ある人々は、行政がコッツウォルドウェイのようなナショナルトレイルの維持費を負担したくないと言っているというようなキャンペーンを誘引している。それらはナショナルトレイルである。そこには国からの助成金と国に任命された職員がいるが、彼らはそれを変えたがっている。だからランブラーズはそのことについてもキャンペーンをしている。海岸にも新しい歩く権利ができています。しかし、常時ではないため、ランブラーズは行政にこの海岸ルートに新しい道を作るために予算を廃すべきだと主張している。これは国レベルの話であるが、ランブラーズは地方レベルでも同様にアクティブに活動していて地域の組織もできています。

この私たちは、カントリー・エイボンであり、アイボン地区ランブラーズと呼んでいます。そしてブリストルにもローカルグループがあります。もしあなたがランブラーズの会員として全国組織のランブラーズに参加するとしたら、自分が別のグループに入りたいと思っても自動的にローカルグループに配置される。そうして今、ランブラーズは104,000人のメンバーがいる。そのうちエイボン郡は2,000人前後、そのうちブリストルには800人の会員がいる。ローカルレベルでは有給職員はいない。ランブラーズには委員会があって、全く正式な組織対応をする。76年前の1930年代も正式な組織で地方委員会の組織が構成されていることがわかる。ほとんどのローカル委員会はフットパスに責任のある人間を貼り付け、オーナーがフットパスを封鎖しないようにしている。人々もよく監視し維持管理を行っている。もし問題が起きれば、彼らはランブラーズの本部はアドバイスを求め、必要な行動を起こすことができる。

わたしはフットパス問題を手がけていない。わたしにはちょっと複雑すぎるように思う。わたしはウォーカーに及ぼす別の問題を扱っている。基本的にランブラーズはふたつの目的をもっている。一つは人々が歩く全ての場所を守ること。そこはわたしとクリスさんがしばしば重なるところで、わたしは実際はフットパスのことではないジャンル、つまりブリストルの緑の空間とセンターに関係している。もう一つはウォーキングのプロモートであり、人々をもっとウォーキングに引き寄せようという本部の人たちがいて、行政とかけあって、クリスさんが特に言っていた貧困層のエリアに予算を持ってくるようなことである。貧困層の彼らをウォーキングに引き込むような動きをランブラーズも行っている。このグループにはブリストル市民を活動に巻き込む委員会があり、ともに作業をしているメンバーもいる。ほかにコミュにティでしていることは、クリスさんのように委員会との関係でフットパスの清掃がある。歩く権利の事務所ではランブラーズがフットパスをきれいにするおかげで人々のウォーキングが成り立っていると語っている。

わたしたちはフットパスをプロモートするために委員会とともに働き、委員会の協力とプロモートを通じてたくさんのフットパスを作ってきた。私たちは北ブリストルほど裕福ではない南ブリストルで活動し、ある人はそこにフットパスを考案し委員会も広報している。今、わたしたちがキャンペーンしているのは、作るには高価なブックレットのプリントである。そうすることで、ウォーキングを創出し多くの人をウォーキングクラブであるランブラーズに参加させている。ブリストルのランブラーズは素晴らしいプログラムをもっており、どのようにそれが良いかは信じられないほどで、わたしがランブラーズに入った理由もウォーキングが好きなこととそのキャンペーンをサポートしたいと思ったからだ。また、わたしの仕事もわたしがボランティアでケアしていたウォーキングを扱っていたからだ。そうしてわたしはメンバーに会い、とてもいい人ばかりで、グループと歩き始めた次第である。これ(黄色のブローショー)は今年のプログラムである。

ランブラーズについて独りよがりだと思っている人々もいる。また一般的に言えば、多くの方は組織のキャンペーンには参加しない。というのは若い人はこのごろオンラインでキャンペーンしている。人々ももちろんそれでいいと考えている。彼らはフットパスも完全にそれでいいと考えている。田園へのアクセス権は勝ち取られた。しかしある人たちは、彼らが怒りを持っているときに参加して来る。クリスさんがブリストルの多くのメンバーを獲得したのは、彼らが急に OSS が緑地を守ってくれる組織だときづいたからである。しかし彼らが怒りを持っていない時も、彼らは利益を有する。あなた方は歩く権利を行使するためになんの代償も払う必要がない。大部分の方は歩く権利はそこに元々あると考えている。実は委員会が維持しているからいつも存在しているのである。だから全国的なメンバーはだんだん高齢化している。いつものことでそれも自然である。いろいろ見回してみると、ウォーキングが組織化されだんだん入会している。

人々は権利を守るためのランブラーズのキャンペーンに猛烈なイメージを持つと言うが、

確かにそういうときもある。とてもむずかしく厳しい話である。あるメンバーは歩く権利の全てを守るべきだと言う。私たちのネットワークは歴史的なフットパスでできておりそれは 100 年以上前から人々が望んできたものである。彼らの農場から教会まで道であり、歩く権利のそもそもの形であり、農場から境界への道であると同時に農場から出るときの気晴らしの道でもあり教会から出て行くための道でもあった。だから私たちはいろいろな用途の歩く権利を持つことになった。しかし人々はマップの中に今まで全く使われていない（実績のない）ところを見つけるのである。あるランブラーズはそのようなことから批判されたこともある。

クリス；最近わたしがランブラーズが取り組んでいることで気づいたことは、福祉が必要なグループのための寄金である。関節炎など医療上の問題や太りすぎで減量しているような、歩くのが困難なひとたちである。彼らは 3 マイル歩いているが、ランブラーズが通常歩くよりも短い距離で歩こうとしている。それはナチュラルイングランドによって寄金が寄せられていた。

スーザン；この国で変わり始めていることの一つは、政府がかつてやっていたことを止めることをきめたことである。そして政府は私たちのような団体にもっともっと引き受けるよう求めている。ランブラーズも確かにウォーキングの役割の推進の部分のように、政府が寄金を積んだスキームを引き受けている。本部の中にもローカルの私たちとともに働くグループがいる。彼らはかつてやってきたことであり、今は、政府のスキームによって寄金が用意されている。それらはかつてナチュラル・イングランドで行われ、今はランブラーズとマクミランによって運営されている。それは健康を目指したウォーキングのグループでとても複雑な仕組みである。私たちは今彼らともかなり密接に関わって仕事を進めている。

（それは政府がこのようなプロジェクトにお金を使っている理由なのか？）そうだ。政府の変化であり、政府が人々に求めている哲学の変化でもある。それは政府機関に変わって実施しているチャリティに対する姿勢でもある。ランブラーズのように引き受ける組織体を求めている。ナチュラル・イングランドは政府機関で、大幅に予算がカットされた。だからプロジェクトがどのように推移するかを注視している。」

このようにして、スーザンさんの持ち分のブリーフィングが終了した。質問は、特に訳さなかったが話の途中で本文に盛り込んだ。スーザンさんは、これらの動きと諸制度の蓄積を評価しながらも、「古すぎる」とひとこと付け足した。歩く権利の積み重ねたエネルギーと年月をかけた蓄積の厚みには、あらためてため息がでるが、スーザンさんの話はそれとつきあっていくしかないのだ、といているようだった。

### フットパスに繰り出す

スーザンさんとお別れしたのが昼過ぎの 12 時 20 分。日本から来た 3 人と白鳥さんは、

クリスさんの案内でコミュニティ・フォレスト・パスへと向かうことになった。今日は 4 時に国のプロジェクトであるコミュニティ・フォレストであるフォレスト・オブ・エイボンのプロジェクトについて話を聞くため実施運営しているトラストにお邪魔することになっている。早速 5 人、ウォーキングの出で立ちでサスペンションブリッジ（長さ 420m、高さ 100m）をわたり、高級住宅街の車道を昇りながら詰めていくと、高さ 1m ほどの石の壁面にステップがあった。ここからフットパスが始まるとクリスさんが言う。フットパスは最初のうちは広大な牧場と道路の際にあって、自動車の音もひっきりなしに聞こえていたがやがてほとんど聞こえなくなった。標識を見れば、フットパスとホースライディングの兼用、つまりブライドル・ウェイのようだった。この日の前半歩いた 1 時間ほどのコースは街を俯瞰する丘を下るものだったが、たいていは左側に林を見ながら歩いた。右側はゴルフ場のように刈り込まれたところもあるし、牛の糞が落ちている放牧地、採草地、草ぼうぼうの原野まで様々で、林の方は、あるがままという英国らしいものだった。しかし、あるがままをプラス評価できるのは、往々にして管理の意図が見えるときであるが、その点この一帯は土地利用のメリハリがしっかりしているのでラフさも心地よいのだと思う。これは北海道でも同様である。

#### （コミュフォレパスの写真 2 枚）

サインはさほどないけれども、牧場をまたぐ際にはしっかりしたキッシングゲイト（ドア形式）かスタイル（またぐ形式）が完備されている。ルートは丘でわずかにアップダウンがあり歩きやすいが、植生はかなりラフである。アシュトン・コート・エステートの一帯は子供のいない金持ちが市に寄付したもので市の協議会が管理している。クリスさんがスライドで説明した woodwose が出てきたので記念写真を撮った。結構な存在感をもった直径 1 m 以上ある彫刻である。こういった、ややスピリチャルな感じのするオブジェはウォーキングのアクセントとして素敵である。フットパスコースにこのようなアートっぽいものがあると、雰囲気は大分変わって、里程標のようなシンボルになるだろう。

1 時間半ほど歩いて、ダブコート Dove Court というレストランに到着。ここで遅い昼食をとる。鯖の燻製とかビーフのパイとかにももちろんビールも頼んでシェアする。クリスさんはここ 2, 3 年、フットパスの利権に絡む調整をボランティアで勤めているという。だからある事業を行う際には行政と事業者双方がクリスさんにアクセスするようになっているという。また、そうしないとその事業が動いていかないらしい。わたしは、日本で英国のコモンズの勉強をしていると、カントリーサイドのフットパスやコモンズばかりが強調されるが、最近、OSS の創始者のひとりオクタビア・ヒルが推進した貧困層のための憩いの公園という 2 面があることに気づいた、と伝えた。クリスさんはその通りだ、と言い、なにか付け足してくれたが早口でメモすることができないでいるうちに話題が移ってしまった。

## プロジェクト「コミュニティ・フォレスト」

食事を終えて別ルートからアシュトン・コート・エステートに向かう。ここのコミュニティ・フォレストというのはクリスさんが推薦したコミュニティ・フォレスト・パスを包含する、国の「コミュニティ・フォレスト」という施策の名前であり、ブリストルに設けられたのは全国 12 のうちのひとつ「フォレスト・オブ・エイボン」である。コミュニティ・フォレストのホームページ等を参考に背景をまとめると、英国では都市周辺部に産業界時代の遺棄された土地、炭鉱跡地や工場跡地、運河等が生活環境を悪化させている。この国のプロジェクトはそれらの土地を活性化させ地域を再生させるために、これらの環境を余暇、レクリエーション、文化活動、生物多様性の強化、気候変動対応など、都市と経済、そして社会的再生の包括的パッケージを提供することを目的としている。阿波根あずさによると、「農村局 Country Agency と林野委員会 Forestry Commission によって旧工業都市や様々な問題に直面する都市近郊を対象として始められた事業」で、英国全土で指定されている。ブリストルのそれは 5 つの自治体にまたがっており、面積は 57,300ha あり、その 6 割がグリーンベルト、市街地が 2 割、廃棄物処理場跡地や工場跡地などの開発地が 1 割、その他が 1 割とされている。

### (図：英国 15 のコミュフォレ：ホームページから)

ここを訪問先のひとつに選んだ理由は、筆者が事務局を勤める NPO 苫東環境モモンズの柱の一つになる事業に、あるコミュニティ（町内会）に隣接した森林 70ha をコミュニティの構成員とともに修景から発生材の薪としての利活用まではかるコミュニティ・フォレストと密かに呼んでいる森があったため、まさにコミュニティ・フォレストという名称でどんなアプローチが行われているのかに関心をもってアプローチしたのが最初だった。しかし、ホームページからの情報は限られており、なかなか全貌が見えない。そして壮大な国のプロジェクトで懐が深い。ブリストルに住む白鳥さんに聞いてみると、意識して行ったことはないが、しばしば出かけているところもその一角らしい、という話だった。それほど広大で空気のような存在にも思えた。モモンズとフットパスの事例を調べる一環で、現状と課題などを伺うことにしたのだった。

アシュトン・コート・エステイトビルは広大な丘のオープンスペースの中にある。その事務所でわたしたちを迎えてくれたのは、Jon Clark さんでフォレスト・オブ・エイボン・トラストの Executive Director である。がっしりした音響のいい静かなオフィスで早速ヒアリングが始まった。エイボンのコミュニティ・フォレストは 1992 年に農地や土地利用に関する調査が行われ計画が作成されたのだが、冒頭、この国のプロジェクトは公共の資金注入、公的支援が 17 年間で終了し、それらは今、小さなチャリティに変わったと紹介された。2000 年には国から自治体への肩代わりが提案されたが、いずれの自治体も拒否した

ために 2005 年コストカットが行われ、2008 年にトラストで再スタートを切ったという。当然、中心となる事業も変わった。

もともこのプロジェクトは 7%程度の英国の緑被率を大幅にアップさせることを目指していたように、新しい事業の中でも樹木が足りないという英国の問題があってそこへ欧州の進んだ森林管理を持ってくるのが目的になっている。ドイツなど欧州の都市は森林があり、そこで散策などのレクリエーションも活発に行われている。先に述べた林野委員会 Forestry Commission というのは第 1 次世界大戦後の木材政策によって生まれ樹木を植えることに主眼を置いていたが、今や、コミュニティ・フォレストとの関係は薄れているという。コミュニティ・フォレストの目標の一つに環境改善があるがブリストルにはない。また、炭鉱跡地なども植樹のニーズが高いが、このあたりにはないので、運動としては農家にお金を払って農地に木を植えてもらっている。

### ( プロジェクトの before & after )

17 年で国主導のビッグプロジェクトが小さなトラストの運営するものとなり、そのせいで途中の経過がホームページではなかなか読み取れなかったのである。ジョンさんには、かつてのサポーターや資金供給と現状をビフォー&アフターの図にしてもらってとても納得したが、これは事業の失敗と言うよりも変遷とみていいのではないかと、思われた。実際、ホームページでは過去の実績を以下のようにまとめ、この仕事は英国最大の環境再生の先導役となったとして、進捗度を数字にしている。

#### 実績

- 1990 年以來、イギリスにはコミュニティ フォレストがある。
- 10,000 ヘクタール以上に新しい森林を植栽
- 27,000 ヘクタールの森林が管理下にある
- 12,000 ヘクタールの生物の生息域が作られた
- 1,200 km の生け垣が復元または植えられた
- レクリエーションやレジャーのために 16,000 ヘクタールの森と緑の空間を開放
- 4,000 km の歩道やサイクルルートが復元または作成された
- 従事し関与した多くの人々に彼らの地域が良くなる発見があった
- 地域が改善された人々の生活を改善するための 1 億 7500 万ポンドを超える投資効果があった

現在ここでは事業目的を絞り植林という活動に特化して動いている。クリスさんのお孫さんも、このトラストの植樹プログラムに参加してとても感激して帰ってくると話していた。わたしはブリストルの街を少しだけ歩き工場跡を含む都市景観を見、ロンドン東部の



オリンピックスタジアムなどが産業跡地や荒地の再開発を期して行われたという報道記事を読んで、英国は産業革命以降の環境改善を今も現実の課題としてやっている国ではないか、それほど 2 次産業の歴史があるのだ、と妙に合点がいくような気がしていた。プロジェクトの閉じ方も破綻ではない別の着地をしている。その足取りはクリスさんやスーザンさんにも的確に理解されている。つまり見守られている感じだ。

帰途、オフィスから別ルートで B & B に向かうことになった。クリスさんが同じ所を帰りたくない、というのが発端だったが、もっともな話である。クリスさんのパワーポイントでもサーキュラーなフットパスが「チキン」と「ブッディスト」という名前で紹介されていたが、フットパスの醍醐味はこのようなオリジナルな「パス・デザイン」であり、これは北海道の散策の日常でもよくあることである。クリスさんの即興ルートは、B & B の下の運河に出るルートであった。実はここがブリストルの一大ビューポイントだということである。下から運河と川の延長線上に吊り橋を眺めるポイントで、なるほど、絶景と言えた。もちろんそこには眺望のためにしつらえられた年期の入ったベンチが据えられていた。

(マップ図：チキンとブッディスト)

(ビューポイントからの集合写真)

かくして、長い英国初日のヒアリングは終わった。夜は B & B のそばの繁華街にあるイタリアレストランに出かけた。

【3日目】

9月15日 土曜日 快晴 トランジション・タウン「ストラウド」とパブリックフットパス「コッツウォルド・ウェイ」

B & B の窓からの光景

朝は 4 時に起床。盛りだくさんだった昨日のメモを少しつながりを持てるように整理したが、日本語と英語のメモが入り乱れて理解不能の部分が多々あることに気づいて驚いた。またメールの送信がうまくいかないことが判明。北海道の地域 SNS 「どっとねっと」に昨日の行程の日記をアップする頃、ようやく夜が白んできた。窓によると、エイボン川の対岸の牧場からいくつかの気球が飛び立つところだった。空は快晴で雲一つない絶好の気球日和である。朝 7 時半、さらに次々と舞い上がり、それらがこちらに向かって飛んできて、室内までバーナーの轟音が響いた。青空に気球は実によく似合う。この B & B のウリでもある窓辺からの風景はまさに絶景とっていいものだった。遠景は川向こうの丘、その手前にエイボン川、その両側は河畔林、目を近景に移せば、そこは B & B や住まいごとのバックヤードで、これが実に丁寧に手入れされたボーダーガーデンで芝も美しい。昨日、主のサイモンさんに自分たちがやっているのですかと聞いたところ、少しはにかむように

イエスと答えていた。

### (窓辺の光景と庭) 2枚

#### トランジッション・タウンとは

9時、白鳥さんの車でブリストルの北にあるトランジッションタウンのストラウドに向かう。この日ストラウドでは、ハウス・リノベーションの公開イベントがあり、わたしたちはそのいくつかを見学しようというものである。トランジッションタウンというのは日本ではまだ聞き慣れない言葉だが、その概要はおおむね次のようなものである(英語版 wikipedia を筆者抄訳)。

「トランジッション・タウン Transition Town は、トランジッションネットワークまたはトランジッション運動とも呼ばれ、ピークオイル、気候変動の破壊、経済の不安定性に応じて弾力性を構築するために働いているコミュニティの草の根ネットワークである。また、Transition town は、パーマカルチャーを原理とする環境と社会運動のブランドをも意味している。これは 1988 年に発刊されたデザインマニュアル、ビル・モリソンの「パーマカルチャー」に依拠する。トランジッションタウンは町の持続可能な未来への"ロードマップ"として、エネルギー生産、健康、教育、経済、農業の領域で全面的創造的適応を目指しており、トランジッション・イニシアチブとして、英国で急速に普及し、2010年5月の時点で、400のコミュニティを介して存在する。これらは公式 Transition Town として認証され、イギリス、アイルランド、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、米国、イタリアとチリでプロジェクトが展開されている。

このプロジェクトの中心的ねらいは、一般に地方に反響が多いが、持続可能な生活への気づきと、将来に向けエコロジカルな回復力のある地方を作ることである。コミュニティは、エネルギーの量を減らす方法を探し、化石燃料に頼った供給チェーンへの依存をなくしていくことである。食べ物はその最も大事なジャンルで、時にフードマイルでなくフードフィートと呼ばれる。トランジッション・イニシアチブはこれまで食べ物を作るコミュニティガーデンを創造することを意味していた。産業は交換を無駄にし、古いものを再利用することなく浪費してきたという反省にたっている。ただ、トランジッションの基本コンセプトはコミュニティの化石燃料からの積極的な脱却である。ここでいうコミュニティとはすべてのプレイヤー、つまり地域の人々、地方の研究機関期間、地方の代理店、委員会などすべてを含んでいる。」

トランジッション・タウンという言葉をはじめて聞いたのは、オーガニック野菜づくりをして英国ではじめて自給自足の街としてエリザベス女王に認定されたトッドモルデン Todmorden、そして近隣のヘブデンブリッジ Hebden bridge であった。これらはわたした

ちがヒアリングの拠点にするブリストルからはやや遠すぎると訪問をあきらめかかっていた時に白鳥さんが見つめてくれたのが、このストラウドだった。ここは、オーガニック野菜ではなく化石燃料からの脱却を目指しており、ホームページのタイトルには「トランジッション・ストラウド」とあり、低炭素社会の生活様式への移行を明確に目指した地域グループである。ここのホームページによれば、世界中に現在 1000 のイニシアチブが展開されているらしく、インターネットで検索すると、日本でもトランジッション鎌倉、小金井、葉山、相模湖などのネットワークが見つかった。

ストラウドは この日 10 数カ所で、トランジッションをテーマにしたハウスリノベーションの展示が行われていると聞いたので現地に赴くことにしたのだった。詳細はまた別の機会に紹介することにして割愛するが、ホームページと現地情報を総合すると、ストラウドにはエコトリシティ Ecotricity というグリーンエネルギー発電の大手会社の本社があり（街の中心部にでんと構えている）、このグリーンエネルギーの供給会社は、ある消費者が電源供給会社をこの会社に切り替えるたびに、トランジッション・ストラウドに £ 60 ずつ寄付するという仕組みになっている。この変換による利益は、グリーンエネルギー発電の建設と供給に回されるほか、ストラウドに 250 名の雇用をもたらすというものである。詳細では電気だけだと £ 40 , ガスも含めると £ 60 というものだ。

もうひとつここで見たかったのがファーマーズマーケットである。もしここがヘブデンブリッジのように有機野菜が盛んであればそこで色とエネルギーの両方の話を聞こうと欲張っていたのだが、有機野菜は市場の外れでヒッピーのような方々がひっそりとやっているだけだった。圧倒的な品揃えと量と店舗の数、そして人の波。こんなに賑やかな市場を歩けば、気分が高揚してしまいそうである。出店していた陶器屋さんの話では、結構地元と近隣の人が多いとのことだった。

## （市場の風景）

### トランジッション・ストラウドとハウス・リノベーション

さてリノベーションであるが、わたしたちは 20 近いオープンハウスのなかから、比較的近くて情報量の多そうなふたつを選んで、まずエコ住宅のニック・ウィアさんを訪問した。案内板にはオープン時間が午後だと書いてあって、そうとは知らずに来た我々はあわや出直すところだったが、通訳の白鳥さんの粘りでなんとか案内してもらった。煉瓦の外壁に新建材で断熱を施し、内部は薪ストーブボイラーを使用していた。バックヤードも徹底してオーガニックだったが、リンゴの木についての果実は徹底的に虫食いであった。しかし手を抜いた細長い農園はある種の一貫した美学がにおう。エコは大変だ、覚悟がいるとわたしは直感した。服も髪もあまり洗ったりしない、ということになるのか。

## （薪ストーブボイラー）      （ランチ）

教会そばの大繁盛のレストランでランチをたらふくいただいた後、もう一つ訪れたところは、ガラスを多用した住宅で、チャイムを押して出てきてくれたハリー・シャンカさんも、オープンは翌日の日曜日だという。そうであったにもかかわらず、日本からわざわざ来たことを武器に、結局、しばし説明してもらった。ハリーさんは女性建築家で、チャリティとして参加していた。エコ住宅にリノベーションする際の骨子は、ヒートポンプ、ソーラー施設、外断熱、セダム（ベンケイソウ）を使った屋上緑化、雨水利用、であった。このようなプロジェクトに対する政府の支援体制もよく、改築の際に景観条例に抵触するので申請をしたが何も問題がなく進んだらしく、ハリーさんはそんなストラウドの行政当局を高く評価していた。また、ストラウドのトランジッションの柱のひとつはこのエコ住宅、リノベーションであることはわかったが、パーマカルチャーの方はどうか聞いてみると、それは非農家の篤志家がやっているとのことであまりメジャーではなさそうだった。つまりトランジッションの思想をもとに、実践のツールは各地さまざまということになるのだろう。

## （リノベーション2）

### ナショナル・トレイルへ

考えてみるとこの日も盛りだくさんだった。このあとわたしたちは、ナショナル・トレイルのコッツウォルズウェイをちょっとだけ歩いてみる計画だった。コッツウォルドウェイは2007年にできた英国で最も新しいナショナル・トレイルで、北はチップングカムデンから南はパースまでの延長102マイル（164km）、これを6日から9日をかけて歩く（マップ national trail COTSWALD WAY から）。ストラウドでも街のそばをこの有名なフットパスが通っているのだが、ちょっとパーキングから遠いと考えた白鳥さんが選んだのは、オットンアンダーエッジである。ストラウドから直線距離で南西へ15km離れたやや山間の街である。マップでは、確かに市街地の中心にコッツウォルズウェイが重なっている。途中、思わぬ渋滞を何とかしのいで着いたオットンアンダーエッジ Wotton-under-Edge は、フットパスの宿場町のようなところで、街道にはすばらしい大型のハンギングバスケットが延々と吊るされて圧巻だった。中心部のパーキングに車をおいて、500mほど車道を西へ歩いてようやく歩行者専用のフットパスに着いた。いきなり昇りが続き、何人かのウォーカーにもであった。わたしも行ったことがあるチップングカムデンから来たというウォーカーと立ち話すると、今日はここのSwan hotelに泊まるのだという。展望地があるからと励まされて別れややいくと、確かにとても快適な展望が開けた。フットパスの醍醐味だ。数頭のポニーと、祖父らしい人とやってきたらしい人なつこい地元の坊やとしばし歓談したが、実は全く意味がわからなかった。いっぱいしゃべってくれる子供の、問わず語りのような話が理解できなかったのは我ながら衝撃であった。

## (コッツウォルドのマップの写真)

ハンギングで飾られた通りに戻りレストランでお茶を飲んで休んでから、4時半頃、オットンアンダーエッジを発って、ブリストルの隣のバースに向かった。バースは世界文化遺産の建物群があるので、そちらに寄り道して街を巡り、そこで夕食も済ます算段である。B & Bに着いたのは午後 10 時半ころで、この日も結果的にハードになってしまった。

### 【4日目】

## 9月16日 日曜日 曇り ランプラズとフットパスを歩く

### 英国に住む日本人からみたフットパス

英国のヒアリングは、歩く権利やコモンズの緑地を民間の人々がどのように関わっているのか、どのように利用しているのかを直接肌で感じることに主眼を置いた。ランプラズのスーザンさんとOSSのクリスさんに、団体の理念とそれに基づく地域での具体的な活動について伺っているので、この日のウォーキングはとても興味深いものだった。このウォーキングには北海道の滝川出身で、ブリストルを中心に同時通訳を業とされている但田美紀子さんが同行してくれることになっていた。但田さんは渡英する 30 年前まで、北海道では山登りをしていたこともあって英国では自然にフットパスに入ったとあとで聞いた。但田さんと白鳥さんはある日偶然知り合ってから親交があった関係で今日の話になったもので、こちらとしては、このほか、ランプラズと週日お付き合いする時間も体力も自信もないため、途中でお別れしてショートカットの短距離ルートとするためにも、よく慣れたガイドは願ってもない話だった。

但田さんは 8 時 45 分に B & B にみえて、早速目的地に向かった。白鳥さんは昨日、およそ 50 マイル(時速約 80km)でビュンビュン飛ばしてきたが、但田さんはカーブの多い郊外の住宅地を 60 マイル(約 96km)でぶっ飛んだ。動体視力がかなり優れていないとこれはできない話だ、と妙に感心しながら、しかし、車中は「今回のリサーチの目的は何か」から始まって「ご自分とフットパスの関わり」「その他の自己紹介」などもガンガン語りながら、同時通訳ならぬ各種同時進行モードであった。さらに、ランプラズ誕生のきっかけとなった事件や 13 年間毎年 80 人以上が歩けばフットパスとして認められマップに掲載される仕組みに感動したこと、ランプラズのメンバーは典型的なミドルクラスの人が中心であること、だから時間とお金は十分にあること、庶民にはやや近寄りたがたいこと、英国のチャリティは日本人にはなかなか入りにくいことなど、日本ではなかなか肌では感じられない実感を時速 60 マイルで話してくれた。但田さんは、英国のこんな仕組みに驚きながらその背後にある歴史に目を見張ってこられたようだ。そして、35 年前にはフットパスに労働階級の人などいなかったのに、10 年ほど前から歩く人が増えてきたと観察している。

## ランブラーズと歩く

### (駐車場の集合風景)

この日のランブラーズの集合場所は、ブリストル南西部のメンディップという石灰岩の丘陵地帯でチーズで有名なチェダーがここにある。そのストックヒルの森 Stock Hill forest の駐車場が集合場所だった。次々と車が集まって最終的には30人くらいになったが、車はたいてい相乗りである。但田さんが聞いてくれたところでは、車はかなりシェアするらしく、1マイルー人10ペンス換算で払うとのこと。メンディップの駐車場まで仮に40kmとすると、一人2ポンド50ペンス、3人合わせて700~800円を運転者に払うことになる。やがてスーザンさんもやってきて挨拶を交わした後、わたしたち5人が日本人であることを紹介され、わたしたちはグループの輪の中に入り名前だけの自己紹介をした。このグループは歩くスピードではBクラスで時速2マイルが標準らしい。この日、近くにAクラスの27人も来ていて、もっともっと速いスピードで歩くらしい。この日、最後尾を歩く人 backwalker が紹介されて、出発。

幅1.5mほどの小道は歩行者専用というか昔の野良仕事用の道のように、ところどころ泥状であり、北海道にもよくあるフットパスといえる。一旦、舗装道路に乗かってまた、牧場の縁を上っていく。まさに北海道的であるが違うのは石垣のヘッジで、北海道にはこれがない。この石は、わざわざここへ運んだのではなく耕しているうちに出てきた石を仕方なく積んだものだと言ったことがある。但田さんはスーザンさんとなにやら歩きながら話し込んでいて戻ってきておっしゃるには、スーザンさんは英国農水省の役人だった方でCROW ACT 2000に関わってきたこと、フットパスの期限は12世紀のマグナカルタにさかのぼることなどを伝えてくれる。また英国人は基本的に教えるのが好きだけど今日は日本人が調査に来たという理由もあってホスピタリティのマインドはかなりアップしている、とおもしろい分析を披露してくれた。わたしが森林のフットパスを得意としている、という話をすると、英国の森林のフットパスでは、木が切られて道が変わるのであまり行かないらしい。確かに林業で作られた道は木材生産が終われば放置されるのは日本も同じで、なるほどと思う。それと森林は目印や展望が得られないことが多く、慣れたところでないマップを持たないで歩くのはむずかしい。

### (歩く風景)

傾斜のある牧場の斜面を上っていると、ブリストルのランブラーズの長老と紹介された年配の男性がどこから調査にきたのかと言うので、日本の北の方にある北海道、その札幌という街だと伝えたのだが、北海道はもちろん札幌もぴんときていない様子だった。話はまったくはずまなかった。こんなこともある。但田さんに、そろそろ小休止だろうから

そこで集合写真を撮らせてくれるよう頼んでもらった。10分ほど歩いたところでその場所になり、かなりそれらしい画像ができた。ちょうどそこはルートが急に渓谷に降りて再び上る手前で、ランブラーズと別行動に入るには実に格好の場所だった。撮影後、陽気なランブラーズを見送ることになった。それにしても歩くスピードはとても時速2マイルではなく、3マイル、つまり時速5km以上だったと思う。

### (集合写真)

#### 英国の田園風景に思う

決して大きくはない耕地防風林のような林と、ラフな草地、沿道というのは、北海道も同じだが、刈り込まれた公園よりもほっとするものだ。この感覚がわからないとフットパスはつまらないだろう。そんなどこか緊張のほぐれるような道をたどって、「凶暴な牛、注意」という看板を見ながら恐るおそる牧場を横切ったりして小一時間で駐車場に戻った。いずれのルートも地図上に描かれたもので、いわゆるパブリックフットパスである。駐車場で靴を履き替えて、パブに向かう。とてもパブのありそうな集落も見えないが、但田さんが案内してくれたのは一軒家のようなパブで、ここチェダーはチェダーチーズ発祥の地だからチーズはおすすめだとおっしゃる。試しに大好きなブルーチーズを含むプレートを頼んだらブルーチーズは信じられないような山盛りで来た。北海道ならこれだけで1,000円以上になってしまうだろう。そんな量を含みながら料理の1プレートが800円ほどだった。そして全体がとてもおいしく、つい完食してしまう。但田さんは「ほとんど出来合いのものだがアレンジがうまい」と種明かしも興味深い。もちろん、ビールもいただきながらの歓談であり、60マイルの但田さんも1パインのビールを半分ほど空けた。

15時にB&Bのまえで但田さんとお別れした後は、ほんの束の間になってしまったが、白鳥さんにブリストルの名所を巡ってもらった。運河やドック、大聖堂、コンサートホールなど、歴史のあるインフラがしっかり施されてきたのがはっきりわかる。石畳、石造りなどは特に富の蓄積を感じさせる。4時過ぎに白鳥さんのお宅によって紅茶をごちそうになる。お宅はセミ・デタッチドと呼ばれる2軒が連なった瀟洒なお宅で、フロントヤードは車が3台ほど駐車できる駐車場に、裏はガーデニングの庭が広がっている。連日、ハードに動き回って昼食もしっかりとってきたから、この日の夜はスーパーで飲み物と食べ物を買ってB&Bのリビングで、19時から3人だけの小宴を開いた。

## 【5日目】

9月17日 月曜日 プリズトル～ロンドン～レッチワース～（戻って）ウィンブルドン

### ハワードと田園都市

英国5日目は列車でプリズトルを離れてロンドンに向かい、田園都市として歴史的に有名なレッチワースに出かけた。英国に着いてから毎日、遊びのない結構ハードなスケジュールをこなしていたので、列車移動の長い、かつヒアリングの予定のないこの日はいささかゆったり気分の視察になる。フットパスを含んだコモンズのテーマからも少し離れる。そうはいても、コモンズを求める願望の根幹と、田園都市のそれは、田園や森林や原野というオープンスペースを生活の中に位置づけて、快適な環境を享受したいという点では通底するものがあり、環境改善の探求という点でも背後は一本の共通する線につながっている。

田園都市というのは、英国の社会思想家エベネザ・ハワードが1903年、当時の新産業勃発による工場建設によって都市の環境が著しく悪化した反省から、郊外の農村に都市と農村を合体したような新しい都市建設を始めたものである。都市と農村の各々の良さを取り入れた職住近接の理想郷をめざしたものであることから、「都市と農村の結婚」という構想イメージは現代でも話題になることがある。そのニュータウンが建設されたのが、ロンドンの北約55kmにあるレッチワースであった。

ハワードのイメージした田園都市は、面積約1,500ha、計画人口33,000人で、1903年というのは田園都市の事業家のために非営利の会社組織「第一田園都市会社」が設立された年らしい。2003年はレッチワースが生まれて100周年にあたりここで行われた記念行事などに日本からも建築家などが大勢訪れた、とあるブログでは紹介されていた。筆者も都市計画や造園の勉強をしているときに、ハワードの田園都市に出会い、今回の訪問は楽しみにしていたひとつであった。日本の現在でも、渋沢栄一の田園調布や千里ニュータウンがこの田園都市レッチワースを参考にしたものであることはつとに有名であるが、街づくりの手法はいろいろな社会実験としての意味合いも込めて、今でも試みられているとも言える。しかし、今般の特徴は拡大する都市対策ではなく人口減少と高齢化であるから、シユリンクする都市にどう対応していくかが中心になっていくだろうから、視点としては真逆のような工夫が求められるのだろうか。

### レッチワースへ

わたしたちは8時半にプリズトルパークウェイ駅を出発し、まずロンドンのパディントン駅を目指した。ここでスーツケースを預け地下鉄のキングスクロス駅からケンブリッジ線でガーデンシティ・レッチワースに向かうのだが、パディントンにもうひとつ大事な用事があった。この駅に、英国の作家マイケル・ボンドの児童文学作品に登場するパディントンベアの銅像があるのだそうだ。パディントンの熱烈ファンと称して辞さない関口さん



にとっては、ひょっとして今回の旅行で個人的には最も楽しみにしていた出会いだったかもしれない。ブロンズのような金属でできており、撫でたり肩をくんだりできる小ぶりなものであった。一方、レッチワース方面に乗り換えるキングスクロス駅には、ハリーポッターが魔法の学校に通う時に使ったとされている9<sup>3</sup>/<sub>4</sub>番プラットホームという表示があり、ここもファンが並んで祈念撮影をしていた。11時53分の列車だったので昼食は思い思いに買い込んで、列車の中でピクニックのように済ました。

列車は12時半にはレッチワース・ガーデンシティ駅に到着した。案の定、こじんまりした地方駅で駅舎を出た街の外観も平坦な普通の欧州の街に見える。インフォメーションセンターでパンフをもらって、見つけにくいと評判の藁葺きの博物館を目指した。敷地が広くかつ瀟洒な高級住宅街とおぼしきあたりを進んで、このあたり、とふんだ境界に目指す博物館は出てこない。行き過ぎたと思った一角の公園内道路で黒人の青年ビジネスマンに聞くと、二つある、そのうちの一つにちょっと案内してあげるとおっしゃる。そうして50mほど歩くと、白鳥さんから見つかったよ~、のサイン。どういうことだ。ビジネスマンには丁寧にお礼を述べて別れてやっと藁葺き博物館に入ると、受付の女性はふたつあったうちの一つは先般閉鎖された、閉鎖された理由だったら当局に聞いて欲しい、みたいな対応をした。黒人青年は閉鎖された方へ案内しようとしたようだ。確かに道路の反対側を4人で目を粉にして見てきたはずなのに、なぜこれが見つからなかったのか。

博物館の中身は左がハワードと田園都市を紹介した小さな展示室、そこにはハワードの蠟人形が置いてある。右は、レッチワースに建設されたコルセット工場の写真展示だった。博物館の裏に回るとそこは大木と芝生からなるキャンパスタイプの公園になっていて、歩行者なら断然こっちを歩くはずという仕掛けになっていた。先ほどの黒人青年はこの博物館の裏のフットパスを歩いてわたしと出会ったのだが、自分が博物館脇を歩いてきたことを知らなかったというわけだ。それほど地味な博物館であった。

### ( ブログの航空写真 )

博物館を後にして駅前に広がる商店街と広場に向かった。駅前のアーケード街と中心広場にはスーパーや商店が並ぶ。なるほど、ハワードの田園都市の中核になる広場の真ん中にいるという実感。レッチワースは今では高級住宅用地として不動産価値も高いという。あるブログで見た航空写真によると、田園と緑に囲まれたコンパクトシティである。ロンドンから小一時間でこんなに閑静な住宅地に到達できるのであれば、わたしならどちらを選ぶか。依然として、都市か農村かは、ハワードの3つの磁石が提示したように、どちらもいいものを備えているのだからその合体した環境の田園都市を選ぶことになるのか。純粹に住み心地を考え、理想的な住環境を改めて考えてみる時の止まり木の役を、この図は今でも立派に果たすように思われる。

### ( 図、3つの磁石 ) 村田喜代治

レッチワースと博物館を見て思ったことは英国の街づくりへの取り組みの深さと時代背景である。産業革命後、労働者階級の生活環境の悪化、社会全体の住環境の劣悪さを是正しようとする社会正義と根気、しつこさのようなものを感じるのだ。今はもうあまり耳にすることがなくなったシンボリックな都市計画の理念、「ラドバーン」。本格的なラドバーンをわたしはニュージーランドのクライストチャーチでみたが、通過交通からは離れて閑静で広い庭には大木があり、小路の終点にはロータリーや噴水があり、小路のクラスターの背中部分は大木と芝の広大な緑地が広がり、フットパスが自然風に巡らせてあった。クライストチャーチもガーデンシティであり、あちらは家庭の庭を中心としたガーデンが観光の目的まで高まっていた。

100年前の希望に触れて少し余韻を残しながらキングスクロスに戻り、パディントン駅でスーツケースを引き取ってから、地下鉄でウィンブルドンのホテルを目指した。北海道の報道関係の方と5人で会食後、白鳥さんはブリストルに帰った。

### 【6日目】

9月18日 火曜日 曇り時々晴れ ウィンブルドン・コモンとエッピング・フォレスト

#### ウィンブルドン・コモンへ朝の散歩

英国では是非見ておきたかった場所がコモンズとしての森林である。その一つが、テニスのウィンブルドン大会で有名な地区にあるウィンブルドン・コモンである。地図を見ると、このような広大な緑地がこのコモンの周辺には随所にあり、ミッチャム・コモン、キャノンヒル・コモン、リッチモンド公園など、広大な緑地とゴルフ場があって、むしろ点在ではなくこれらの緑地の間に住宅街が挟まれているという状態（これも実際はかなり高級な住宅だった）である。もう一つは、エッピング・フォレストである。このふたつは、平松紘氏の「庶民物語」で紹介されており、クリスさんのOSSが初期に取り組んだ重要な成功例でもあった。

#### ( グーグルアースからウィンブルドン・コモン )

まず、ウィンブルドン・コモンとは、ロンドンの南西部に広がる1100エーカー(460ha)の公園である。平松紘氏の「庶民物語」では次のように紹介されている。

「...ウィンブルドン・テニス大会の主催者「全イングランド芝生テニス・クローケー・クラブ」は、130年前の「ウィンブルドン・コモン」紛争に勝利した住民団体を基に形成されたウィンブルドン管理組合...の下に、幾つかのクラブの1つとして作られたのである。...115年になるウィンブルドン・テニス大会、それは1860年台に盛り上がった庶民の「内な

る楽園」を求め、1つのうねりの飛び火であったのである。そのうねりは、19世紀後半に展開したロンドン首都圏におけるコモنزの公園化である。その最初のケースが「ウィンブルドン・コモン」紛争であった。1865年に議会の下院で、首都圏コモنز法の審議のために「オープンスペース(首都圏)特別委員会」が設立されたが、この委員会が設立された契機が、「ウィンブルドン・コモنز」紛争の解決のためだったのである。委員会は、ウィンブルドンのコモنزを全面的に保全するばかりでなく、ロンドン首都圏における諸コモنزの公園化を勧告した。この勧告を法律にした1866年首都圏コモنز法によって、イギリス全土におけるコモنزが「オープンスペース」つまり公衆に開かれた緑の空間になる。

このようにウィンブルドン・コモンはコモنزの公園化の先駆けであったわけだが、そのもとになった裁判の証拠とは、農民たちの祖先が権利を15世紀から維持してきた証拠となる記録が決め手になったという。さらに紛争の火種は当時の地主が、コモنزの一部を売ってそのお金で周りを囲い公園にするという案を出したのが始まりだった。訴訟は結果的には囲いのないコモنزとして維持されるようになり、現在の姿になったという。今の管理費は約1億2000万円(wikipedia)、この経費のほとんどはコモンから3/4マイル(1.2km)いないに住む住民から課税によって徴収しているが、この仕組みもこのときの紛争の決着時に決められたという。まさに、闘いと法律化の歴史だ。

この日のわたしたちの行程は、主たる視察先をエッピングフォレストにしぼり、場合によっては早めに切り上げられたら小磯先生と関口さんは大英博物館などロンドンのシンボルともいべき文化施設、建築群などを見ることにしていた。だから、ウィンブルドン・コモンは最初からこの日の朝か、夕方など、サブの時間にのぞき見ようというねらいを持っており、そのために高級ホテルの多いこのエリアの中に、まさに偶然のように手頃なホテルを探してもらい日本から予約したのだった。それで、最終的には、ウィンブルドン・コモンはこの日の朝、朝食前の午前7時に3人そろって軽く見て戻ってくることにした。と言うのも、ホテルの受付の男性から簡単なマップをもらったときに所要時間はホテルから歩いて10分と聞いていたからである。

一旦地下鉄ウィンブルドン駅方面に戻って、ウィンブルドン・ヒル・ロードを北西に進むとコモンはあるはずだった。しかし、15分程度歩いてもなかなかサインは出てこない。道路清掃をしていた黒人男性に聞くと逆の方角を指す。そんなはずはない。一応お礼を言って、マップを信じてそのまま進んでようやくそれらしい雰囲気のあるところにたどり着いた。広大な広場の片隅でトレーニング中の夫婦にマップの現在地を聞くと、マップがどうも不完全なようで、それで何となくわかった。やはりコモンの南端にいるらしい。そしてここは、あらためてエリア表示などはしない、日本の公共公園とは少し違ったある空間。

荒れ地、水たまり、そこにフットパスが巡ってあるのがわかり、ジョギングや散歩をしている人が何人かいる。北側に広大なオープンスペースが広がって見えるが、整備のグレードはきわめてラフで、草丈のそろわない芝地である。日本の公共の公園ではあまりないレベルだと思う。だからいわば広大な空き地であるが、たたずまいは、公園と言えば確か

に公園風であり、遠方には森林地帯が望まれる。文字通り園地化されていないオープンスペースである。ウィンブルドン・コモンは約 400ha あるから恐らくあの一帯もコモンのなかであることは間違いない。「高級住宅街に囲まれた広大なやや荒れた空き地」。これがウィンブルドン・コモンの第一印象であった。一応、南はずれからコモンをのぞんだことになるので朝飯前の一仕事はこれで終了したことにして、帰りは高級そうな住宅街を縫って戻った。わたしはこのコモンにちょっとこだわりがあり森林も見る必要があったので、夕方、もう一度訪問することにした。

### エッピング・フォレストへ

この日は通訳の白鳥さんのいない 3 人だけの小旅行だが、地下鉄の感じも大分慣れてきたからさほど不安もない。まずディストリクト線でノッピングヒルゲイト駅まで行き、そこでセントラル線に乗り換え、終点のエッピングまで 1 時間 20 分の行程だった。エッピング・フォレストはロンドン中心部から 13km で、南北に 19km と長く、幅は最大で 5km、途中には 10 近い駅があるが、どこが最もアクセスしやすかったのか、今もってよくわからない。ただ、どこかの駅で降りてまずビジターセンターに行ってみるという選択肢があった。後の祭りである。

エッピングフォレストは、現在のロンドン近郊では最大の森林公園だとされる。フォレストと言うだけあって、ウィンブルドン・コモンと違って森林の狩猟場だったらしい。この森が公衆の森になったきっかけはこうある。「19 世紀半ば、エッピングに土地を所有する 18 名の地主は、長く続いていた国王の狩猟犬を買い取りエッピングを「フォレスト解除」することによって、自分たちの意のままに宅地開発しようとした。これに対し、農民たちがフォレスト法によって保障されてきた権利を主張し裁判に訴えた」(平松)。農民たちは自分たちの権利とともにロンドン市民のレクリエーション利用する実績を前面に出し、裁判ではロンドン市を代表訴訟人にしたのが一つの決め手になったという。またクリスさんの O S S の前身であるコモンズ保全協会がここでもエッピング・フォレスト設立の支援役を担ったとされる。ロンドンの 22% を占めると言うグリーンベルトの一角であるが、野鳥が 144 種、植物が約 300 種というから、ウトナイの約 250 種、苫東コモンズ周辺の植物約 700 種には及ばないが、巨大な都市の直近でこの緑地面積は評価しなければならない。

エッピング駅まで行くことにしたのは、この地区を歩いた記事を探しているうちに、やはりフットパスのように歩いた事例が見つかったからである。その行程がエッピングからデブデンまでの 5 , 6 km コースでちょうど良かったという記述があり、これはちょうど良いと安心してしまった。しかし、この見立てが安易すぎたようだった。帰国後でマップを見るとエッピングからデブデンまでは駅の直線距離でも 10km 以上あるし、フットパスではおよそ 2 倍と考えた方がよい。この辺に怠慢が元の躓きの原因があった。エッピングの駅に着いてみると、エッピング・フォレストの紹介などは何もなく、案内図の掲示などもない。駅員の方に窓口から訪ねると、この駅から森へ行くにはやや遠いし昇り道で、隣の

テイドンボイス駅に戻ってそこの方がよい、とアドバイスされた。幸いややして折り返しの列車が来たので一駅バックすることにした。

### (エッピングフォレストの看板)

テイドンボイス駅で降りて何となくそれらしい森が見える方へ 3 人で歩き出してまもなく年配の男性にエッピングフォレストの入り口を聞くと、明示はしなかったが、200m ほど先の郵便ポストの左にサインがあると教えてくれた。そこには確かにロンドン・コーポレーションの名前で、エッピングフォレストと書かれていた。しかし、方角や全体図などはない。そこからはなんとなく、森のある方向にどんどん歩きながら、きっとあるだろうエントランスを探した。それらしいフットパスに 2, 3 度出会ったがどうも「これが入り口」というものがない。再び、高齢のご夫婦に「エッピングフォレストの入り口」を執拗に聞いたところ、パーキングの場所を教えてくれた。そこになにかある、というのだ。再び、車通りの多い車道を何となく道なりに西へ進んだ。しかし 20 分ほど歩いた地点で、これは時間の無駄になる気配が出てきた。デブデンに向けて道が南下しないうにエントランスがないのである。わたしは森林系フットパスが NPO のテーマでもあるしもう少し粘ってみる必要があったが、小磯先生、関口さんを道連れにするわけにはいかない。ここで一応、2 班に別れることに申し合わせして先生らはここからロンドンに引き返すことにした。

### (エッピングの地図)

わたしは意地でも歩いてやるぞ、という気持ちも半分あり、もう半分は、詳細な地図を用意しなかったことを後悔し始めていた。サインも案内図も何もないのだ。何年か前にコッツウォルドを歩いたときには、村の売店にしっかりしたフットパス専用のマップがそろっていたのでなんなく地図とコンパスの必需品セットで歩けたのだが、今は肝心のマップがない。そしてサインもない。しかもルートは網の目状で、これではお手上げかもしれない。そんな予感がだんだん強くなってきていたが、ままよ、時間は十分あると高をくくって歩を早めた。別れてすぐ、森に入るための駐車場が出てきたのでここから本格的に森に入った。案内図などはないから、方角だけが頼りで、デブデンは南南東あたりの方角になる。

やっと森林系フットパスらしい道にのかった。道は歩行者専用のフットパスではなくて馬も歩けるブライドルウェイだった。最初はやや西北西に向かっているのが不安だったがやがて南の方向へカーブを切った。ところどころにお目当てのポラード仕立てのブナが出てきた。噂に聞き写真ではよく見てきた英国の変形樹木である。ポラードというのは、農民がまだこの森の樹木を薪やいろいろなものに利用していたころ、高さ 1,2m の高さで繰り返し伐って利用され、何度も切り戻され萌芽を繰り返していたものが、放置されるよう

になって、こぶからほうき状の枝が伸びるいわば奇形である。わたしの東北の家あたりでは、桑の木がこんな風にして何度も切り戻され萌芽を繰り返すので、ミニポラード仕立てになっていた。しかし直径が1mにも及ぶポラードの大木などお目にかかったことはない。壮観である。

エッピングのポラードのよく見られたそのあたりは、1haあたりの樹木の本数（立木密度）がおよそ600~800本、森林の蓄積はおよそ200~250m<sup>3</sup>あるいはそれ以上で、主な樹種は欧州ナラ、とブナである。立木の密度がさほど高くなく、もちろん、ササがないから森は見通しがよく、道もよく管理されているので大変歩きやすかった。平日ながら、何組ものウォーカーに会い、すれ違う人の半分はシングルのウォーカーだった。さすがにウォーキングスタイルの出で立ちの人は片手にマップを持っていて、見せてもらおうとコッツウォルズで但田さんやスーザンさんらが持っていた細いフットパスのルートも網羅した詳細な地図であり、その網の目状のマップを見て、敗北感が確定的になった。

2人と11時45分に別れてから約2時間、エッピングフォレストを歩いたというか彷徨った格好だが、どうもわたしにはエッピングフォレストが好きにはなれなかった。というのは、森林のどこへ行っても自動車の音がするのである。英国人は飛ばすから、まさに轟音と言っていいその音がひっきりなしにする。2400haの南北に長いその森の真ん中を幹線道路が走り枝線も通っているからだ。人によっては、音が聞こえて安心という人もいるし、逆にアクセスがしやすいという利点もあると思う。帰国してから、マップを探してトレースしてみると、自動車幹線と枝線の各所にパーキングがあり、人々はそこを基点にして森を巡っているようだった。平地林の典型で有り、日本の用に里山の奥に奥山があってアクセスが次第に減る環境とは違う。

南下してある駐車場で休んでいると、窓を開けて話しかけてくれた男性が、どこへ行くのかと言う。デブデンに行きたいのだけだと答えると、まだ5km以上あるから駅まで送ろうとおっしゃる。お言葉に甘えて助手席に乗った。年格好は七十歳以上で、後部座席の犬と毎日8マイルを歩くのだと言う。デブデンの街に向かいながら、この町は第二次世界大戦でドイツの爆撃を受け大被害を受けたが、1950年に田園都市の街づくりを始め「小さなレッチワース」と呼ばれているのだと教えてくれた。すかさず、「昨日、そのレッチワースに行ってきた」と話すと驚いていた。偶然とは言えなんとできた話題だろうか。これからの予定を聞かれたので、明日はヘルシンキに向かうというと、一度だけ行ったことがあると行っていた。弟がオーストラリアに住んでいて日本には観光でよく行っているようだと話していた。なぜエッピングに来たのか問われたので、コモンズとポラードに興味があって、と言うと、あの大きな木は150年か200年くらいだろうね、と返された。わずか10分ほどのドライブだったが、おもしろいエピソードができたしなにより助かった。心からお礼を言って駅前でお別れした。駅前のマップを見ると、デブデンには、駅裏にインダストリアルパークと称する団地が隣接しているようなので、列車の時刻までそちらをのぞいてみた。入り口ゾーンにベンツのショールームと、反対側には緑に囲まれた建物があり、瀟洒なシ

ティ型のインダストリアルパークのようだった。また、駅周辺に大勢の若者が往来していたが、ここにはエッピングフォレスト・カレッジ・スポーツフィールドというのがあって、そこを利用する若者のようだった。

これで悪戦苦闘のエッピングフォレストを後にして再びウィンブルドン駅に戻った。ちょうど地図ではロンドンを真ん中に置くとウィンブルドンとエッピングは反対側に位置し、これを正味1時間40分くらいで突っ切ることになる。土地勘が養われるがロンドン市内は地下なので、いわゆるロンドンの中心は全く見ないで過ぎることになる。

### 再びウィンブルドン・コモンへ

ウィンブルドンの駅からは、今度はタクシーに乗ることにした。どうも博物館あたりが中心のような気がしたので、まっすぐそこへ頼んだ。小さいそれは正式にはウィンブルドン・コモン・ポストミル博物館というらしいが休館中だった。ただそこは比較的広い駐車場があってそこから四方に広がる森林や広場やゴルフ場に続く幾通りもの道があった。早速、林に入るとさすがに時々人がいてサイクリングする若者も少なくない。直径が1m以上の大木、それらの多くはヨーロッパナだったが、なにやらスピリチャルな雰囲気も漂わせていた。

薪がうずたかく積まれた広場には、トラクターに据えられた薪割機がジョイントされていた。この薪は市民に分譲されるらしい。おそらくはコモンから出た倒木などが運ばれてくるのだろう。道路を挟んだ向かい側の50haほどの草地の広場にはところどころベンチがあって、老夫婦などがたたずんでいる。植生はやはり思い切りラフである。この広場から直線的に南下していく途中も、イラクサやワラビの繁茂するゾーンがたびたび出てくる。時々、ヒイラギも混じる。

そんなラフな藪の中にやがてぼっかりとゴルフコースらしいものが見えてきた。林に挟まれた狭いコースが、一応よく刈り込まれてはいるが周囲は藪である。ああ、これが噂に聞いた普段着のような英国のゴルフ場か、と合点がいく。林の中のフットパスを縫って南下するとクラブハウスについた。そのハウスは住宅街の外れにあって、全体がウィンブルドンコモンと接しているわけだ。公園の周囲の道路はものすごい路上駐車で、平日夕方5時近いのにもかかわらず、車から乳母車を出して子供と散歩に出たり、ジョギングにでかけたりと、確かに大変な利用度だ。朝、引き返した地点まで小一時間をかけて南下してみると、学校帰りの子供たち、散歩の人たちが網目状の道をたどって交錯するのである。行政が管理する公園とも違う、有料の公園とも違う、境界が何もなくて、フリーアクセスの広大であくまでもラフなエリア。緑地と訳されるオープンスペースの原型みた思いがする。これでいいのだ。管理費は30円/m<sup>2</sup>だから、日本の都市公園から見ると大分安いレベルと言える。夜は7時に小磯先生の部屋で英国最後の会食をした。

## (後日談)

実を言えば、わたしは北海道の冬の山や沢登りで地図読みをかなり訓練し、方向感覚も悪くない自信があった。それがこのごろ、もろくも崩れるのだ。日本の街をポンチをの地図を持って歩くと方向を失うことが2,3回あった。正確なマップではないポンチ絵であることに原因の一端はあるのだが、わたしは猛烈に老化を意識していた。そこでエッピングフォレストのフットパスを彷徨ったことについて、ブリストルでフットパスを案内してくれた但田美紀子さんにこんなメールを出した。一ヶ月遅れのお礼でもあった。

=====

但田さま

9月、ブリストルでフットパスをご案内いただいた草苅です。その節はとても有意義な楽しい時間を作っていただきありがとうございました。落ち着いたらお礼のメールを、と思っておりましたところ、こんなに遅くなってしまいました。

訪英時にはご紹介する時間もなかったのですが、わたしが事務局を勤めるNPOは企業の用地あちこちを合計すると約200ヘクタールほどになる企業の土地を、環境コモンズというネーミングをして、コモンズのようにフットパスと薪生産利用をする代わりに、広葉樹林の間伐とフットパス管理を通年で休みなく行うというグループです。ちょうど今回ご案内いただいたような防風林と採草地からなる数百ヘクタールのフットパスエリアも擁しており、やはり、我ながらいささか英国風だと改めて見直しました。こんな場所です。  
<http://seinen-kishukusha.com/240617kashiwabara-footpath.pdf>

このたび但田さんから話いただいたことは心に響く英国体験ばかりでしたが、特にミドルクラスの慣習のような所は、日本でまったく味わうことのできない話であり、スーザンさんの物腰などを思い返していたところです。

さて、後日談です。わたしは北大のワンダーフォーゲル部出身で、農学部の林学科という学科を卒業して北海道の森林を見るためにその後かなりの山々と森を春夏秋冬歩いてきた関係で、歩くことと、方向感覚などに妙な自信をもっていました。しかし9月18日はエッピングフォレストを一人で歩いていて、なんと、迷いました。考えてみれば無謀な話で、全く見知らぬ森林をコンパス一つだけ持って、あとは現地のマップボードとサインで何とかなるだろうと甘く見たのでした。

最初エッピング駅から歩こうとエッピングで下車し駅員に聞くと、ここからは昇りがあるから一駅戻ってテイドンボイスからの方がいいと言われ、そこへ向かってようやく入り口みたいなものを教えてもらいましたが、その後がぐちゃぐちゃ。現地には入り口のサインも、マップも方向のサインもほとんどなく、マップを持ったウォーカーに聞きながら歩いているうちに時間切れになりました。結局、デブデンのそばまで行き、そこでであった



年配の男性に駅まで車で送ってもらいました。縦横に走ったパスは、やはり詳細なマップを持たないと初めての人間には無理だなあ、と痛感しました。お恥ずかしい限りです。しかし、おかげさまで大変いい思い出ができました。聞くところによると、方向感覚は加齢とともに衰えるようです。これからは気をつけたいと反省もしました。

当日の集合写真など画像を数枚送ります。また、来年、コモンズ関係の発刊までうまくつながりましたらそれもお送りできるようにします。期待しないでお待ち下さいますように（笑い

では、お礼のメールが大変長くなりました。あらためてありがとうございました。どうぞ、お元気で活躍くださいますように。

=====

そして数日後いただいたメールが下記。

=====

草苅 健 様

ご丁寧なメール、ありがとうございました。

その節はかえって、お土産のお礼を言いそびれておりまして、失礼いたしました。あのとき通訳するのは、余計なことだったかな、とも思ったのですが、様々な政府省庁から調査団や企業の研究開発に関わる方々に、通訳として同行して、綿密な情報収集に20年以上関わってきましたので、つい、いつもの調子で通訳をしてしまいました。もし、失礼がありましたらお詫び申し上げます。

写真をお送りくださりまして、ありがとうございます。そんなに昔のことではないのに、皆さんの顔がとても懐かしいです。

イッピンフォレストについては、名前はよく聞くのですが、実際に歩いたことはありません。メンディップでお会いした時、森が好きなんです、と言われたのを覚えています。迷われて、楽しむどころではなかったかなとも思いますが、貴重な経験でしたね。仕事上、日本から来られた方、本当にたくさんお目にかかっていますが、あそこまで行かれた方は草刈さんだけです。自分の目的をもって、それを達成されたというのが、私には共感するものがあります。それと、読みながら思ったのですが、標識や案内のしかたも含めて、きっと森の管理のしかた等が日本と違うのだろうと、推測しました。年ではなくて勝手が違うため、迷われたと私は思っています。

主宰(?)されている苦東コモンズの活動については、あのときにいただきました資料を読ませていただきました。英国のように、すでに古くから土地の利用方法として知れ渡っ

ていないコンセプト。日本では新しいアイデアですので、200ヘクタールの土地の地主さん達の賛同を得る努力は、並大抵ではなかつたらうと推察します。自然保護、生態系保全とともに、ご専門の森林管理のノウハウを提供して、それが一般市民、誰でも楽しめる憩いとレクリエーションの場ともなる。非常に有意義で素晴らしい活動を創始されたと思います。もし近くに住んでいたら、きっと率先して参加させていただいたでしょうね。このような活動が広がって、たくさんの方が自然を楽しめる、イギリスの footpath や commons のさきがけをなることを、そして草刈さんの、今後益々のご活躍をお祈りいたします。

もし機会があれば、一度ぐらい苦東コモنزを歩いてみたいとも思うのですが、残念ながら実現は難しいでしょう。どうぞお元気で、ご指導をお続け下さい。

=====

そしてこれは、クリスさんに出したお礼のメール。

Dear Chris,

This is Takeshi KUSAKARI, visited Bristol three weeks ago.

Thank you for your acceptance of our research group. We could have very valuable time and could hear significant point of view. In addition to that, we were able to walk out beautiful community forest path you recommended. I could enjoy also another walking with Ramblers members two days after peacefully.

This morning, I've found out BAD-tri Charity event in HP. It really encourage me and most impressed stuff in a few days was Green man and Woodwose. Without Asian philosophy, I believe that the land who live in, would plant faith toward the nature or big tree in people's mind and actually we are sometimes inspired by them about many important things.

With hearty thanks,  
Takeshi KUSAKARI